



卷頭言

石田, 憲治

(Citation)

海事博物館研究年報, 36

(Issue Date)

2008-03

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005795>



巻頭言

海事博物館館長 石田憲治

平成20年12月20日の市民ゼミナール最終日に、講師の一人（株）凸版印刷の末吉さんが、「デジタル化と博物館の未来」について話されました。中に“博物館とは……？”その定義の中で英語“Museum”の語源を次ぎのように話されました；

“ミュージアムは古代エジプト、プトレマイオス朝の首都アレキサンドリアにあった総合学術機関であるムーセイオンに由来。ムーセイオンは、ギリシャ語でムーサ（ミューズ：芸術や学問をつかさどる女神達）の殿堂」を意味する”

ひるがえって日本を見てみると、奈良の秋篠寺の伎芸天が芸術の神様で、学問は天神様や文珠様であるらしいですが、ムーサのように一堂に集まって総合的な学術機関は明治になるまで存在しなかったようです。唯一、正倉院の管理をつかさどった人達は朝貢品の価値を判断して、保存整理する方法や技術を熟知していたように思えます。

ムーサの精神を受け継ぐ、欧州、北米の博物館は保存整理をした後、外部に所蔵品を紹介に多くの時間と労力を使っています。正倉院や我国の蒐集家は資料を大切にすることが上に、内に「秘蔵」することでそれら資料の価値を維持しようとしてきたのではないのでしょうか。

深江の海事博物館を少なくとも“Maritime Museum”と称する以上ムーサの一つであると思います。「船」を媒体とした工学的資料を保存整理している博物館ですが、展示している物は製作者の熱意がこもった芸術の域に達したものばかりです。特に今年度の企画展に展示した資料は実に逸品ばかりだったと思います。また、長い時間を経た中で捨てられることなく周囲の人達から愛されてこそ資料価値があります。深江はこれらの資料を駆使して外部へ発信できる学問（＝研究）資料にする人達の集まりであり、日々の努力をおしまず真のムーサに近づくように努力している所だと思えます。

近年、多方面からの貴重な資料寄贈があるのは有り難いことですが、ムーサの殿堂であって初めて、受け皿として存在する意義があるのでしょうか。